

年間第二十一主日

2017.8.27

マタイ 16・13-20

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音の舞台になっている場所は、フィリポ・カイサリア地方だつたと言われています。もう三十年以上も前のことになりますが、神学校の同期の仲間たちと青年司祭聖地巡礼団というスツテカーを張ったツアーバスで、その地を訪れた時のことを思い出します。ヨルダン川の源流に近いその地には、見学すべき史跡もそれほど残っておらず、緑したたる溪谷を、湧き出たばかりの水がキラキラと鮮烈なしぶきを上げて流れ降っていた様子が、今でも目に浮かびます。「日本人のぼくらにはこういう場所がホッとするよな」。仲間の誰かが言った言葉を思い出します。

今日の福音の場面には、イエスと弟子たちの姿しか出てきません。他の箇所では、聞き届けてもらいたい願いをもって、イエスの周りに群がるように押し寄せてきた人々の気配はここには感じられません。イエスの行く先々に姿を現して、執拗に論争を挑みかけてきたファリサイ派の人々や、律法の専門家たちもここには登場しません。

弟子たちだけを伴って、そのような地に憩われたイエスは、弟子たちとご自分の絆を確かめようとされておられるかのようです。「人々は人の子のことを何者だと言っているか」。この問いは、ご自分が人々にどのように受け止められているかを尋ねているのではありません。弟子たちが口々に応える答えを遮るように、イエスはお尋ねになります。「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか」。ペトロはこのイエスの問にたじろぎませんでした。ペトロはイエスが自分たちに何を求めておられるのか正確に受け止めることが出来たのです。人々がイエスのことを何と言っているかが問題なのではない。イエスは、自分たちに何故イエスにつき従って来たのかを問うておられるのだ。そのように受け止めることによって、ペトロはイエスと向き合って立ち、あのように応えることが出来たのです。「あなたはメシア、生ける神の子です」。

ペトロのこの答えを聞いたときのイエスの心の躍動を感じ取りたいと思います。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」。イエスのペトロに対するこのことばをどのように理解したらよいのでしょうか。

「あなたがたはわたしを何者だというのか」。イエスにあのように問われたときに、突然天からの光に打たれたかのように、ペトロの口をついてあのような

イエスへの信仰告白のことばが出たというのではないでしょう。むしろ、ガリラヤの漁師であったペトロが、イエスに声をかけられ、イエスにつき従うようになった時から、イエスのお側近くで彼が見聞してきたこと、そしてまた、ペトロ自身が体験した全てのことが、ペトロの心のうちにあのようなイエスへの信仰を実らせて行ったにちがいありません。それが今、あのヨルダン川の源流のフィリポ・カイサリアの地で、余人を交えないイエスと弟子たちだけの親密な時の経過の中で、イエスがあのように問うてくださることによって、ペトロの口からイエスへの信仰告白となって溢れ出たのです。そしてそれら全てのことが、つまりペトロがイエスと出会って、イエスの後に従ってたどって来た日々の中で、ペトロをイエスのもとに繋ぎとめたペトロのイエスへの想いそのものが、ペトロに対する天の父の導きによるものであったことを、イエスはペトロに気付かせようとしておられるのです。

「わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」。今日の福音は、あの時、イエスがペトロにこのように言われたと伝えています。ガリラヤの漁師であったシモンがペトロ、すなわち岩と呼ばれるようになったのは、イエスが彼をこのように呼んでくださったからです。岩である彼の上に、わたしの教会を建てるイエスが言うてくださったからです。「わたしも言うておく」とは、「わたしは確かなこととして、あなたに言う」ということです。イエスの弟子たちから始まったカトリック教会は、ガリラヤの漁師であったシモンをペトロとされたイエスのこのことばに基づいているのです。そしてそれは、ガリラヤの漁師であったシモンが、イエスに声をかけられ、イエスにつき従った日々の中で、イエスの父である神がペトロのうちに開き示してくださった、イエスの弟子としての、ペトロのイエスへの信仰によっているのです。わたしたちがそこで信仰の恵みを見出したカトリック教会は、このようなイエスとペトロを結ぶ絆によって誕生したのです。

フィリポ・カイサリアの地で、ペトロがあのような精一杯の信仰告白をしたとき、イエスはそのことを誰にも話さないようにと命じられました。弟子たちにはあの時イエスがペトロに言われたことの全てが理解出来ていなかったからです。「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と、ペトロの信仰告白を受けてイエスは言われたのです。ペトロも他の弟子たちも、イエスのこのことばの意味を本当にはまだ分かっていなかったのです。イエスへの自分たちの信仰が何によるのか分かっていなかったのです。ペトロも他の弟子たちも、自分たちのイエスへの信仰に自信を持っていたことでしょう。他の人々がイエスのことを何と言おうと、自分たちはイエスを「メシア、

生ける神の子」と信じるといふ信仰に自信を持って、イエスがそのことを受け入れてくださっていることに満足できていたのです。けれども、ペトロがあの時口にしたイエスへの信仰は、そのような弟子たちの自信によって持ちこたえられるものではないことをイエスは知っておられたのです。そのような弟子たちを連れてのイエスの旅はまだまだ続きます。そしてそのイエスと弟子たちの旅は、弟子たちの自信に満ちたイエスへの信仰が粉々に粉碎されるイエスの十字架へと続いているのです。復活されたイエスが、弟子たちのもとに戻ってきてくださり、十字架の上にイエスを見捨てた自分たちに「あなた方に平和」とイエスが語りかけてくださったとき、弟子たちは、あのフィリポ・カイサリアの地で、イエスがペトロに言われたことばの意味を本当に悟ることが出来たのです。ペトロの、そして全てのイエスの弟子たちのイエスへの信仰は、父である神が開き示してくださることによって可能となる恵みであることを悟ることが出来たのです。

今日の福音の舞台がヨルダン川の源流に近い土地であることは象徴的であるように思えます。ペトロがイエスのへの信仰を告白し、イエスがそれに応えてペトロを礎としてご自分の教会を建てると約束された土地を水源とするヨルダン川は、ガリラヤ湖を育み、さらに流れ降って死海に注ぎます。わたしたちは今、あるゆるいのちを死滅させる死海のような、澱みきった環境の中に置かれているかもしれません。けれども、そこにはヨルダン川の水が注ぎ込まれているのです。イエスがペトロに約束された教会の歴史を通して、わたしたちのいるところまで注ぎ込まれているこのいのちの水脈を遡って、イエスが弟子たちだけを伴って憩われた、わたしたちのいのちの源流にもう一度戻りたいと思います。そこで、ペトロとともに、天の父がわたしたちに示してくださっているイエスへの信仰を新たにしたいと思えます。今日のミサがわたしたちを、今日の福音の舞台に連れ戻すものとなりますように。